

終 章

本研究の目的は、幼児の造形活動における「保育者と子どもの意識のずれ」に着目し、実践事例の分析を行うとともに、明治期よりの幼児造形の変遷をたどり、ずれの起こる原因や類型、またずれをどのように捉え修正しようとしてきたのかを考察すること、そして、ずれを修正していくための有効な手段を「動機づけ」に求め幼児の主体的な活動を促す動機づけのあり方を提示することであった。

本研究では、次のことが明らかになった。

第1節 研究のまとめ

1、幼児の造形活動における保育者と子どもの意識のずれについて

第1の「ずれ」は保育者の教育観を題材や指導として具体化する段階で起こり、次に子どもが題材や指導を解釈する段階で第2のずれが生じている。また、保育者と子どもの間だけではなく子どもと子どもの間にもずれが生じるため、ずれは拡張されやすい。また、ずれは保育者が予め想定したものと異なる子どもの反応として現れ、ずれの連鎖が起こるため、導入段階でのずれはそのまま終末段階まで修正されないまま拡大されていくことが多い。

しかし、上田薫は、人の営みにおいてずれは当然生じるものであり、そのずれをどのように捉え修正していくのかという点が重要であるとしている。そこでずれに対する認識と修正への試みという点で見ると、①ずれの認識はあるが、修正することを放棄している場合、②ずれの認識はあるが、原因が理解できず修正する方法もわからない場合、③ず

れ自体の認識がなく、むしろ自分の理想の作品に近づけたことに満足感を覚えている場合、他にもずれを認めず計画通りに進めていくのが当たり前というように自らの指導を正当化している場合などに類型化することができた。

2、幼児の造形活動におけるずれの修正過程としての歴史の変遷

『幼児と教育』誌に掲載された記事を基に明治期からの幼児造形の歴史をたどると、明治初期は恩物を中心とした教師主導で画一的・注入主義的な保育活動が行われており、保育者と子どもとのずれは大きく、またそのことは正当化されていたと考えられる。しかし明治後期より次第に、保育者の指導と子どもの反応との間にずれが生じているといった課題が意識されはじめ、改善への取り組みが始まっていった。大正期に入ると、倉橋惣三が誘導保育論を展開し子どもの動機に着目することで子どもを主体とした保育への転換が図られたといえる。戦時色が色濃くなる昭和戦前期においても子どもの興味や生活に基づいた保育の試みは絶えることなく続けられていた。

戦後は、倉橋の影響を受けた林に代表される、子どもの発達段階を踏まえて想像力や造形性の伸長を図ろうとする考え方と、指導は加えずのびのびと自由に活動させることに価値を置く久保等の考え方の、大きく二つの対照的な方向性が併存することになり、今日の造形教育思潮の源流となった。いずれも子どもと保育者とのずれの解消へと向かうものといえるが、この流れに反するように昭和 59 年『ピコロ』が出版されると、型紙や作品見本とともに指導事項が明確に記されたハウ・ツー本が、平成期にかけて一気に広がった。目の前の子どもから題材や指導を考えるのではなく、マニュアル通りの作品を作らせるという指導が広範に行われるようになり、子どもとのずれは拡大されているにもかかわらず、その認識はなく、多くの保育者が見栄えのよい作品を作らせることに満足している状況となっている。

保育者と子どもとの間に生じるずれの修正過程として幼児造形教育の歴史を概観する中

で、教師主導の保育から子どもを主体とした保育への転換には、「動機づけ」への着目が一役を担っているということを確認するとともに、現代におけるずれの原因を示すことができた。

3、幼児の造形活動における動機づけの現状と課題

保育者の指導言に着目し、現在保育現場で行われている動機づけの現状と課題を検討した。

まず、実践事例の分析・考察の結果、指導言の用い方に関して、以下の4点の傾向を確認した。

① 適切な指導言を用いることができず、子どもの反応が当初の思いとずれてしまう
場合

② 保育者の指導言が発問として機能せず、質問や指示、説明に終始してしまっている場合

③ 子どもの活動をコントロールするために指示的な指導言を用いている場合

④ 指導言が発問として機能し、子どもを能動的に活動させている場合

①～③のケースでは、結局は子どもたちが保育者の指示通りに動かされているということになり、子ども自らが考え活動しているとは言い難く、保育者には動機づけの概念が薄い。指導言の多くが説明や指示にかたより、発問が機能していない状況にあるため、保育者はほめることで子どもたちの意欲を高めようとし、ほめ言葉を多用することになる。そこでほめ言葉の現状を調査し、結果、保育者が用いるほめ言葉には、以下の意図が含まれていることがわかった。

I 意欲を持たせる

II 保育者の考える理想の作品に近づける

III 認める・受け入れる

IV 考え・気付かせる

一方、「上手ね」、「すごいね」などの直接的なほめ言葉だけではなく、比喩的な表現を使って子どもたちを考えさせたり、子どもたちが発言した言葉に共感的な姿勢を示したりといった働きかけが、子どもの動機づけを促していることを確認した。

また、ずれを修正する指導言は子どもの動機づけとして機能すること、そして動機づけは導入段階はもちろん、活動全体を通して様々な場面で有効に機能させる必要があるという課題を確認した。

4、活動の連続性をもたせるための動機づけを意図した実践

内発的動機付けについて、「他者受容感」、「自己決定」、「有能感」、「知的好奇心」という4つの観点から整理したうえで、内発的動機付けに着目した授業実践例の考察を行った。子どもの興味・関心・必要感、子ども意識の流れなどを十分に考えたうえで、①意欲を高める、②必要性を与える、③想像を働かせる、という3つの要素に基づく言葉かけを用いることによって、内発的動機づけが働き、意欲的・連続的な活動が生み出されることが確認された。

続いて、6ヵ月間にわたる実践（「新幹線をつくろう」「新幹線を見に行こう」「乗ってみたい新幹線をつくろう」）を、新井の3種の動機づけモデルをもとに考察し、活動に連続性をもたせる動機づけの在り方を示すことができた。様々な場面で動機づけを意識した言葉かけや環境設定などを行うことで、結果「またやりたい」、「次はこうしたい」といった気持ちが芽生え、活動が連続的に展開されていき、以下の成果が認められた。またそれらが相互に作用することで子どもが一層意欲を高め、更に次の活動へと発展していく様子が確認できた。

- ① 経験の連続性が生まれたこと
- ② 造形能力の高まりがみられたこと

③ 社会体験活動へと発展したこと

④ コミュニケーションの広がりが見られたこと

ずれの修正過程から捉えると、活動の様々な場面でずれは生じている。上田の言うように、生じたずれに気付くどのような方法で修正していこうとするのかその姿勢が問われているが、現状としてはまず保育者自身がずれに気付くことが先決であると考えられる。新幹線の実践では、連続性をもった活動に発展していくことができたが、これら一つ一つの活動の中にもずれが生じており、そのずれに気付く動機づけの修正を繰り返し行った結果であったといえよう。活動の修正は新たな動機づけによって発展的に行われてゆくことが確認された。

また、動機づけは、導入段階で限定的に用いるのではなく、導入・展開・終末段階と連続的に行うことで、子どもの活動を活性化・持続化させてゆくことが可能であること、特に新幹線の実践のように、「ずれの発生→新たな動機づけ→活動の修正」が効果的に行われた場合、子どもの活動は設定保育の枠を超え、園生活と家庭生活をつなぐ、連続的・発展的な活動へと展開されていくことが確認された。

第2節 今後の課題

これまで見てきたように、現在の幼児造形教育の現状としては、目の前の子どもの実態や幼稚園教育要領の目標を具体化するという視点から選定されるというより、マニュアル書に示された内容をなぞる保育や、園で定められた型どおりの保育が行われる傾向が強い。その方が安定した作品を生み出すことが出来るし、失敗したという思いを感じることも少ない。つまり、子どもたちとの「ずれ」を意識しなくても済むのである。言い方を変えれば、保育者が意図した方向から子どもの反応がずれることを恐れ、ずれを直視しようとしていないのである。しかし上田は、ずれを追求し修正していく問題解決的な姿勢こそが教師・保育者にとって重要であると述べている。子どもの主体的な活動を促すために、

絶え間ない保育の改善が求められているのである。

本論では、内発的な動機付けを促すための保育者の働きかけに注目して考察を進めてきたが、今後の課題としては、次のような点を挙げることができる。

①倉橋は「動物園」や「八百屋」「こいのぼり」など、子どもの興味や関心、生活と結びついた主題を選定し、それを基軸に子ども主体の活動を展開させてゆく「誘導保育」を提唱していたが、本研究では「新幹線」を用いた実践で成果を確認することができた。今後は、現代の子どもたちの興味・関心・必要観に即応し、生活と結びついた主題を選び出し活動展開を構想する必要がある。

②本研究では、子どもの内発的動機づけを促す指導言やほめ言葉の考察を行ったが、作品見本や示範の提示、動作や周辺言語などの指導言以外の保育者のパフォーマンス、また環境設定のあり方など、保育を構成する諸要素について検討し、それぞれ効果的な方法を見出していかなければならない。

③「新幹線」の実践では、子ども同士、子どもと保護者、駅の職員などとの間でコミュニケーションが活性化することで、子どもの意欲が持続し活動が発展していく様子が観察された。グループ活動などの保育形態や、園外の方との交流などの効果についても今後検討していきたい。